

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第422号 平成24年10月26日

## オルフェーヴルは何故敗れたか

10月7日に、パリのロンシャン競馬場で行われた競馬（凱旋門賞）で、日本のオルフェーヴルは惜しくも首の差2着に終わりました。

私は競馬には全くの素人ですが、テレビの映像を見る限り、最後の直線を真直ぐ走っていれば優勝出来たのではないかと思えてなりません。

今回オルフェーヴルの騎手を務めたのはクリストフ・スミヨンさんでしたが、競馬を知る人の中には「騎手が、池添謙一なら勝てたのではないか」という人もいます。競馬は人馬一体のスポーツですから、オルフェーヴルがデビューして以来パートナーを務めている池添騎手に期待が集まるのも頷けます。というよりは、日本の名馬には日本人の騎手が騎乗して欲しいという願いといった方が良いかも知れませんね。レース展開は、朝日新聞（10月13日付）等でも紹介されていますので、それらを参考に振り返ってみます。

オルフェーヴルは、不利な大外18番枠からスタート。終始後方を進みますが、最後の直線で先頭に躍り出ます。この時点では、オルフェーヴルの強さがいかんなく発揮された場面でした。しかし、異変はその直後に起こります。急激にコースの内側に寄って行きます。その様子はテレビの映像からも良く分かりました。スミヨン騎手は真直ぐ走るようステッキをふるいますが効き目はありません。その後柵に接触する等タイムをロスし、結局、最後の最後、ゴール直前で、最短距離を走ってきたソレミアに追い抜かされ（競馬用語では「差された」というようですが）、敗れる事となりました。

テレビ映像を見ていても、本当に残念な感じがしますが、それにしても、2400メートルを3分弱で走り抜けるのですから凄いなと思います。少なくとも、来年に期待を持たせる走りだったことは、衆人の認めるところでしょう。

ところで、オルフェーヴルは先頭に立ったところで、どうして右に寄って行ったのでしょうか。

先日、建築家の安藤忠雄氏の講演を聞いた際、オルフェーヴルの話が話題になり、彼は競馬関係者から聞いた話として「オルフェーヴルは先頭に立ったところで、目標を見失った。これが大きな敗因だった」というエピソードを紹介してくれました。つまり、安藤氏は、オルフェーヴルの話を引き合いに出しながら、「人は誰でも、夢

や目標を持ち、そこに向かって努力すべきであり、目標が有るから頑張れるものだ」という趣旨のお話をされた訳です。

目標を持って生きるという事は、良く生きる事に繋がると私も思っていますが、競走馬については、がむしゃらに前に向かって進むものと思っていたので、オルフェーヴルの話を聞きながら意外な感じがしたものです。

ところが、どうもそういう事はあるらしく、オルフェーヴルの騎手を務めたスミヨンさんも「簡単に先頭に立って目標がなくなった分、最後まで力を発揮できなかったのかもしれない」という感想を述べています。

朝日新聞（10月13日付）は伝えています。「オルフェーヴルは、ソレミアに追い抜かれた直後、驚いたような表情でソレミアの方を見ている。フランスの美女に見とれたわけではないだろうが、最後は走る事に集中できなかった。」と。

競馬の奥深さを見る思いです。

（塾頭：吉田 洋一）